

千葉市仁戸名町 へたの台古墳群発掘調査概報

後 藤 和 民

Ⅰ 発掘調査の動機

千葉市仁戸名町字へたの台の一角に、数基の小円墳からなる本遺跡が存在することは、かねてから関係者の周知するところであり、すでに昭和28年に、武田宗久氏によって「へたの台古墳群」と名付けられている（註1）。しかし、その古墳群の意義・内容についてはもとより、その規模・形態・構成基数についてさえ、まだ正確には把握されていなかった。

もともと千葉市内においては、この種の円墳群がきわめて数多く、現在までに、すでに約70群、約140基以上も確認されているという（註1）。しかしながら、これらのうち一つの古墳群すら、その全貌を明らかにした本格的な学術調査はおこなわれていない。たとえば、千葉市でこれまでに実施されてきた 中原古墳群（註2）、舟塚古墳（註3）、狐塚古墳（註4）、荒久古墳（註5）、七廻塚古墳（註6）、兼坂古墳（註7）および新山古墳群（註8）などをみても、いずれも孤立した大型の古墳か変則的古墳または前方後円墳ばかりであり、小型円墳からなる群集墳が調査の対象となったことはなかったのである。

ところで数年前より、市の教育委員会では、松ヶ丘地区における小学校児童数の急激な増加により、「松ヶ丘第二小学校（仮称）」の新設の必要に迫られていた。種々候補地を求めて検討した結果、その建設用地として止むなくこの古墳群所在地を買収し、この古墳群とともに台地の過半部を削平・整地せざるをえない事態となった。そこでその事前調査について、市の文化財行政を担当している加曽利貝塚博物館に依頼があったわけである。

もちろん文化財担当者としては、この種の古墳群については未調査であり、その意義・内容については不明であるが、今後の研究によってその潜

在的価値が顕現される可能性が充分にあることを理由に、建設予定地の変更または古墳群全体をその敷地内に包含し、「生きた教材」として全面保存すべきであることを強く要請した。しかし、すでに学校用地として買収が完了し、現在松ヶ丘小学校においてプレハブ校舎を仮設して、児童を収容しているが、教育効果や健康管理上問題が多く一刻も早く新校舎を建設しなければならず、これ以上候補地を探している余裕がない。それに、この候補地も地形上狭小なため不適格であったが、現在の状況では止むなく決定したものである。したがって、その敷地内に古墳群の一部たりとも包含する余裕がなく、むしろ全体を大きく削平し、周辺の谷頭部を埋めて、少しでも面積を広めなくてはならないという。

そこで、千葉市教育委員会では、この古墳群全体を発掘調査し記録保存に止めることに決定し、その調査担当を明治大学の杉原莊介教授を会長とする千葉県考古学会に委託した。そして、杉原教授の御指導のもとに、現地における直接の指揮は加曽利貝塚博物館がおこなうことになった。

なお、今回のような緊急事態に至った原因については、同じ教育委員会内にありながら、学校建設の計画と文化財保護の計画との事前協議が全くなかったことと、この種の古墳群の所在についての周知徹底が欠如していたこと、そしてさらに重要なことは、未調査、未解決な問題は、その存在意義や歴史的価値を説得するなんらの力にもなりえないということを改めて認識すると同時に、深く反省させられた。

むしろこの機会に、円墳群の意義・内容について一つでも確実なものを把握し、考古学における古墳群研究に資するとともに、文化財保護においても、市内に残る同種・同類の遺跡の保存と活用には確実な指針を与えるべきである。このような見地から、この古墳群を徹底的に調査し、可能なかぎりの観察を記録に止めるべく決意した。

Ⅱ 遺跡の立地と周辺遺跡

この古墳群は、千葉市仁戸名町字辺田台・作山にある。千葉市の中央部を東から西に流れ、東京湾に注ぐ都川本谷を、東に約4km遡上した星久喜台の下から南に分岐する仁戸名支谷をさらに1kmほどさかのぼった南岸に、南から北に向って突出する一つの細長い台地がある。この台地は、俗に「へたの台」と呼ばれ、星久喜・松ヶ丘の台地平坦部から、東方の仁戸名支谷に向って突出している数本の舌状台地の中の一つであり、この古墳群は、その台地の基部に近い、きわめて狭長な尾根部に展開している。この尾根部の標高は平均28mを測る（第1図、第2図）。

この「へたの台」の北側先端部の扇形に開いた平坦部には、縄文時代中期から後期に属する点在貝塚を伴う集落遺跡・「へたの台貝塚」がある。また、小支谷を隔てた西側の舌状台地の先端部にも、縄文中期に属する環状貝塚を伴った集落遺跡・「月の木貝塚」が存在し、その台地の基部に近い尾根部にも、かつて小円墳が数基存在していた。一時千葉市の塵芥捨て場になったおり、その埋め立て処置の盛土のために、すでにその大部分が削平されてしまった「取林古墳群」である。

なお、今回の調査における周辺部の関連遺跡の追跡踏査の結果、「へたの台」の東側にも同じく小さい谷頭を隔てて南北にのびる舌状台地がありその尾根部には小円墳4基が現存することを新たに確認することができた。この遺跡については、従来知られていなかったもので、ここにその字名をとって「作山古墳群」と名付けた。また、「へたの台」の南側基部に当る平坦部において、墳丘の過半部を失った円墳1基があり、古くから「聖人塚」と俗称されている。さらに、「へたの台」とその西側台地との間に刻み込まれた小支谷の最奥部に当る谷頭の西側台地上に、鬼高期から真間期の土師器片が広範囲にわたって濃密に散布する一画を発見。これを「上峠遺跡」と名付けた。

従来、古墳群とそれを築いた人々の集落との関連が捉えられたことがないが、この古墳群の周辺にはほぼ同時期に属する集落址を確認したことは、両者の関連を追求する上で、今後きわめて重要な意義をもつものと思われる。

Ⅲ 調査の方法

(1) 調査体制

千葉市教育委員会では、この発掘調査が学校建設という教育委員会内部の原因によるものであるから、なるべくは外部に喧伝することなく、教育委員会の直営事業として実施する計画であった。しかし、千葉市文化財保護審議会に諮問したところ、遺跡破壊の原因者が教育委員会であるがゆえに、ことさら、発掘調査の徹底と公平無私の立場から、調査を公開でおこなうべきであり、民間の専門家に委託すべきであるとの意見が強かった。この大方の意見に従って、この発掘調査を明治大学の杉原莊介教授が主宰する千葉県考古学会に委託し、その御指導のもとに、千葉市加曽利貝塚博物館が中心になって、実地の調査を担当することに決定した。その調査体制は次の通りである。

調査主体	千葉市教育委員会
担当部局	社会教育課 千葉市加曽利貝塚博物館
調査委託先	千葉県考古学会会長・杉原莊介 (明治大学教授・考古学)
調査主任	千葉市加曽利貝塚博物館学芸員・後藤和民(考古学)

調査員

千葉市加曽利貝塚博物館学芸職員(薬師寺崇庄司克、市川勇)

芝山はにわ博物館学芸職員(神山崇)

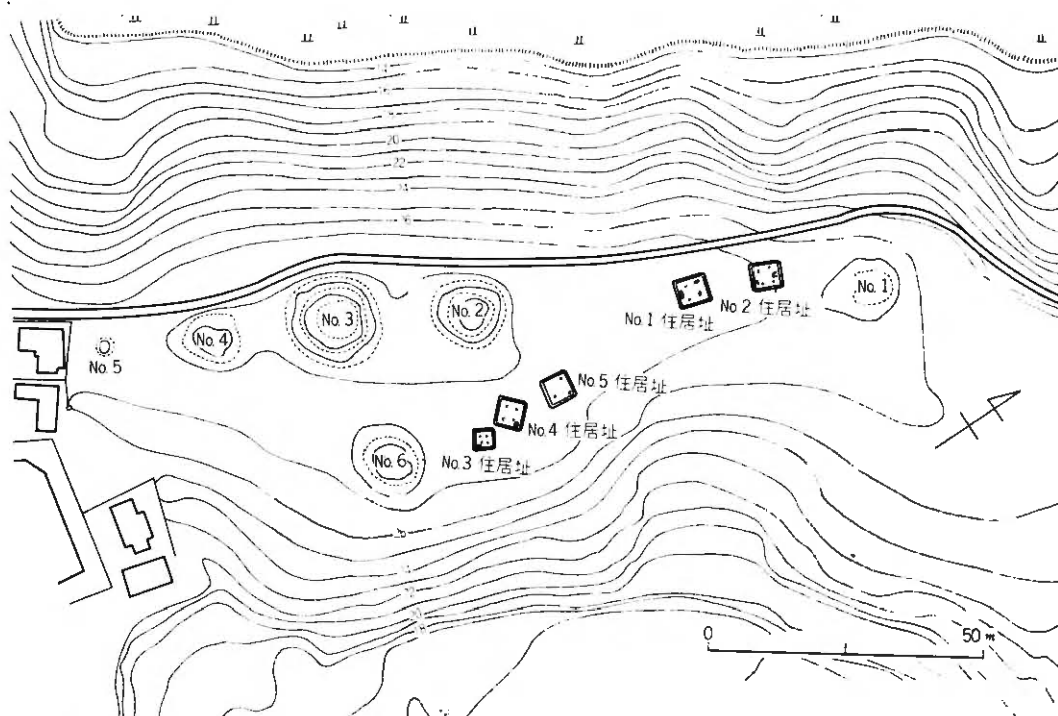
明治大学考古学専攻生(高木博彦、宮入和博、田川良、松村恵司、石田広美、吉村進、葉山茂英、吉田昇、宮崎貴夫、岡崎正雄、高田久代)

明治大学考古学研究部員(上川哲哉、石塚一良、渡辺敬一、西村隆)

立正大学考古学専攻生(増田修、阿久津義雄、上坂悟、斎木勝、江川好英、真田広幸、溝渕、工藤竹久)

明治学院大学考古学研究部員(大島正人、窪田日出夫)

その他、川崎重工株式会社社員・増田誠蔵、日本女子大学学生などの任意参加および補助人夫として十数名の参加を得た。



第1図 へたの台古墳群地形測量図



第2図 へたの台古墳群全景（南東上空より）

(2) 調査期間

まず、地表面において確認しうる古墳の墳丘部およびその主体部の記録保存のために、第1次予備調査をおこない、その発掘成果に基づき、周辺部の台地全面における文化層の把握のために、第2次予備調査をおこなった。それらの結果、発見遺構や遺跡の性格などから保存すべきか否かの最終決断を下し、それによって調査の仕上げをおこなうという方針を樹て、それに基づいて調査を開始した。その結果、実際には次のような調査期間を必要とし、当初の予定・6ヶ月間が10ヶ月以上に延長されたのである。

調査開始 昭和44年10月1日

調査終了 昭和45年8月15日

伐採作業	44年10月1日～44年10月31日、
測量調査	44年10月28日～44年11月15日、
古墳調査	44年11月1日～45年3月31日、
集落調査	45年2月1日～45年6月30日、
城郭調査	45年7月1日～45年7月31日、
整備作業	45年8月1日～45年8月15日、
航空撮影	45年8月15日、

(3) 地形測量および墳丘部測量

狭小な台地尾根部に相接して集合する円墳群の立地や展開の様相を把握するため、縮尺400分の1の平板測量をおこない、明らかに墳丘を有する古墳状遺構8基を確認した。これらのうち、西側の支谷に面するものは5基（北から第1号～第5号墳）、東側の支谷に偏するものは3基（南から第6号～第8号墳）であった。

この地形測量によって、「へたの台」の中央くびれ部において、西側に2ヶ所、東側に1ヶ所、明らかに作意的な削平工事を加えたと判別できる帯状のテラスがあり、それが中世城郭に伴う「腰曲輪」であることが確認された。とくに、舌状台地の北西端には、舩形土塁状の遺構があり、また北東端には、腰曲輪が階段状に連なり、一種の「馬出し」状遺構が認められた。この「へたの台」から仁戸名支谷を隔てた対岸には、城の腰城（註9）、城山城（註10）などがあり、西側小支谷を隔てた対岸の月ノ木貝塚も、その縁辺に腰曲輪や土塁状の遺構がある。おそらく、この「へたの台」は、月ノ木台とともに、中世における前衛的な

あるいは物見としての役割を果たしていた可能性が充分にある。

次いで第1号～第8号墳の各墳丘部について現状を正確に記録し、その形状・規模、その他後世の崩壊・攪乱などによる変化を確認するため、縮尺50分の1、等高線（contour）25cmの精密な平板測量をおこなった。なお、以上の測量において、次の発掘調査におけるグリッド設定の基本杭と併用させるため、ほぼ東西南北の経緯方眼によるトラバース原点を10m間隔に設定した。

(4) 墳丘部の発掘調査

今回の発掘は、完全破壊に先立つ最終的な記録保存のための調査である。したがって、従来のような予備的調査や主体部中心の調査に終るトレンチ発掘法は採用しなかった。むしろ、完全に消滅するからこそ、台地全域の調査が完了するまで、各墳丘相互の比較や再検討、あるいは修正調査が可能となるように、墳丘中心から東、西、南、北および、南東、南西、北西、北東の方向に、合計8本の壁（Section-Belt）を残して、その間の墳土を全面に剝いでゆく、平面発掘法を考案した。もちろん、必要に応じて、その層序などの予察のため、トレンチをも併用した。

また、第2号～第8号墳の7基は、相互にきわめて接近しているの、周溝などの切り合いにより、相互の築造時の前後関係が把握できる可能性を予測して、それぞれの墳頂を結ぶ線上に、巾50cmの壁（Section-Belt）を設置した。

これらのSection-Beltは、主体部の位置を確認した後は、その平面発掘の作業に支障を来たすので、随時断面図を記録した上で取りはずし最終的には、再検討のために東、西、南、北4本の壁のみを残した。なお、この壁による断面的調査によって、各墳丘の構造過程を明確に把握できたことは、今回の調査の一つの成果であった。

なお、各古墳の墳丘部発掘における調査工程については、発掘の着手以前に、調査員との綿密な打合協議をおこない、その調査に当たっての問題意識を確認し、それに基づく有効な方法として、調査の各工程の順序と、その調査目標および具体的な作業の方法について、一応の方針を樹てた。これについては、煩雑を避けるため、筆者の作成した原案（第1表）を挙げておく。

第 1 表

古墳墳丘部発掘の調査工程と調査方法

調 査 工 程	調 査 目 標	調 査 方 法
1. Section-Belt の 設 定	・墳丘部築造過程の断面的把握 ・主体部位置の断面的把握 ・原地形と墳丘との関係の把握	墳頂中心点より、東・西・南・北・北東・東南・南西・北西の方向に、巾 50 cm 長さ 10～20m の壁を残すべく設計する
2. 現 表 土 層 の 除 去	・表土層中にある遺物すべてを採集 ・墳丘築成時の表面状況の把握	Section-Beltを残して、その間の現表土を平面的にはぐ。
3. 周 溝 部 の 露 呈	・墳丘形態の確認 ・主体部位置の限界確認 ・周溝内全面の遺物すべてを採集	表土層の除去、墳裾部の平面発掘、ボーリングおよび Section-Belt 断面などにより周溝落込みを確認し、その内部を分層的に平面発掘する
4. 主 体 部 の 確 認	・主体部位置の確認 ・主体部と墳丘全体との関係把握 ・主体部構造(櫛・棺形態)の確認 ・主体部方位とレベル比高の計測	Section-Belt間の分層的平面発掘と、Belt の断面的観察により位置を確認 8 本の Belt のうち、主体部に係る有効壁を選定し、それをできるだけ残す
5. 主 体 部 の 発 掘	・櫛形態およびその遺構の確認 ・棺形態、裏込粘土などの確認 ・覆土および土壇の確認 ・被葬者および副葬品の確認	有効壁を残し、主体部の平面調査に支障のある belt は、断面図に記録の上最少限度に取りはらう。主体部の平面プラン確認の上、その位置を記録する。
6. 墳 丘 部 断 面 記 録	・主体部と墳丘および原地形との関係を断面的に把握 ・墳丘築成過程と主体部との関係 ・主体部と周溝との関係	有効壁および、東・西・南・北の Section-Belt 側面に巾 1m のトレンチを設置しローム基盤までを掘り込み、その断面状況を記録する(断面実測図、写真など)。
7. 旧 表 土 の 露 呈	・墳丘築成直前の旧地表面状況(プラン設計、祭祀、生活面)の把握 ・旧表土中の遺物、遺構の資料採集	旧表土における古墳設計プランの縄張り、祭祀その他行事の痕跡を追求しつつ、墳丘築造時の平面的状況を観察する分層発掘。
8. 全 面 発 掘	・墳丘上面、下面のあらゆる遺物採集 ・再検討、修正調査	残った有効壁、東・西・南・北の Section-Belt すべてをその断面層位に従って分層発掘。



第3図 NC. 3古墳
の発掘状況

(南方ヨリ)

墳頂の凹凸状掘込
部分が主体部、ポ
ールの位置が周溝
を指す。



第4図 NO. 4古墳
の発掘状況

(南方ヨリ)

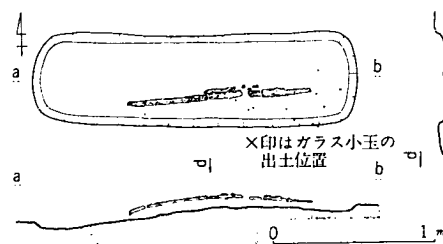
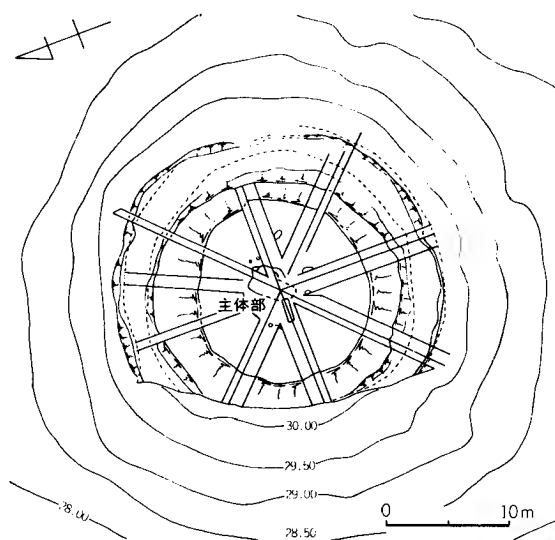
主体部は墳頂では
なく、南側の周溝
がとぎれて土橋状
につき出した部分
に有り、棺状の痕
跡が2ヶ所に並行
して発見された。



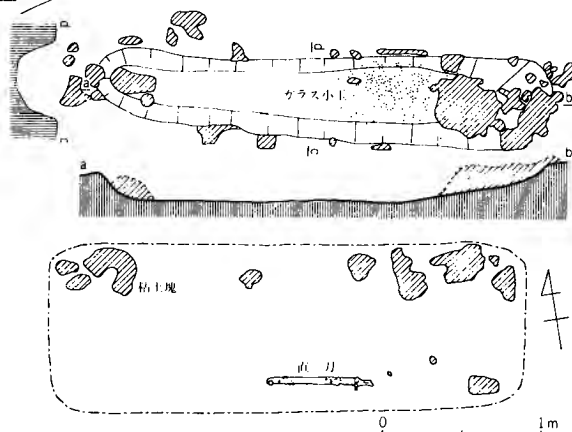
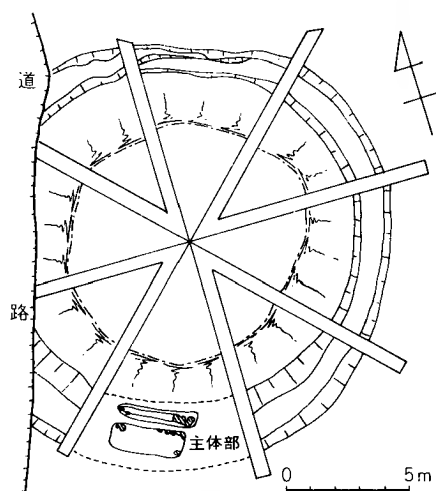
第5図 NO. 6古墳
の発掘状況

(南方ヨリ)

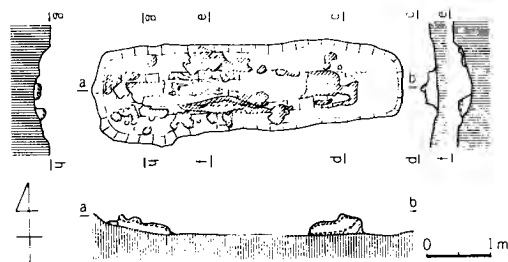
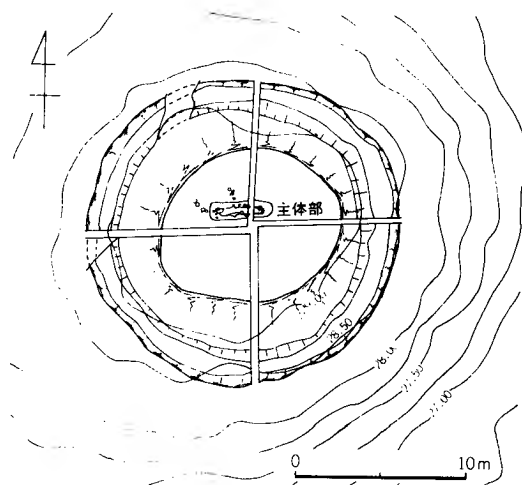
主体部は墳丘のほ
ぼ中央に位置する
が、墳頂ではなく
封土下の旧地表面
から浅い土坑が掘
り込まれていた。



第6図 NO. 3 古墳の墳丘実測図（左） および
主体部（右）実測図



第7図 NO. 4古墳の墳丘実測図（左）および、主体部
（右）の実測図



第8図 NO. 6古墳の墳丘実測図（左）および、
主体部（右）の実測図

(5) 住居址の発掘調査

8基の古墳のうち、第1号墳のみが他の密接した墳丘群から隔絶しており、第2号墳との間に約50mの間隙を有する。これは古墳群全体の展開からみてもいささか変則的である。むしろ、この中間に、後世の削平などによって消滅した古墳が存在した可能性もある。現に、その比較的平坦な空間に、東西に走る土塁状の遺構があり、その一部にやや小高く盛り上がった部分があった。

これらの状況から、調査の万全を期するため、墳丘と墳丘との間やその周辺部一帯の平坦部をも調査の対象とし、その台地のほぼ全面にわたるトレンチ調査を実施した。その結果、墳丘部の周辺から合計5基の鬼高式期に属する竪穴住居址が発見された。これらの住居址については、発見された時点において、おのおの東西・南北にクロスするSection-Beltを設置し、その断面の状況を記録しつつ平面発掘をおこなった。

(6) 古墳周辺の発掘調査

地形測量および台地全体の精密な踏査により、へたの台全体が中世において砦または物見として利用された形跡がきわめて濃厚であることが判明した。また、この台地の北側先端部には、縄文時代の集落址「へたの台貝塚」が存在しているので住居址や貯蔵穴などの関連遺構が分布している可能性も大きい。

そこで、第1号墳の東北部にひろがる平坦部、約60m×60mの範囲に、10mおきに巾1m、長さ平均40mのトレンチを、東北・南北に井ゲタ状に組んで、合計8本を設置し、10m×10mの方形区画を市松模様に1つおきに平面発掘した。また、中世の「馬出し」状遺構の確認のため、その部分を縦断する巾1m、長さ約60mのトレンチを東西に2本設置して、その断面調査をおこなった。その結果、縄文時代の集落関連遺構は調査区の範囲内ではなんら発見されなかったが、「馬出し」状遺構の一部と思われる階段状の工事跡を発見した。

以上のような各種の調査過程において、できる限り多角的な記録を止めるべく、あらゆる角度から平面・断面の実測と写真撮影をおこなった。なお、発掘調査の開始直前と完了直後には、航空機による遺跡全体の空中撮影をおこなった。

Ⅳ 調査結果の概要

以上のようなへたの台古墳の発掘調査およびそれに伴う周辺遺構の調査結果については、その発掘資料や記録資料はぼう大な数と量におよんでいる。現在、鋭意その整理をおこなっているが、その資料の種類は多種多様にわたり、慎重な調査研究を必要とする。この正式な報告は、当然十分な時間をかけて後日に期待せざるをえないし、その本報告の分量もかなりの大部になることは確実である。しかし、ここに一日も早く、発掘成果を公表し、資料の活用・公開をはかるため、不完全ながらも、その調査中において把握しえた内容について概略を紹介することは、博物館や公的機関における一半の義務でもある。

したがって、以下の報告において、頁の制約もあり、煩雑を避けるためにも、個々の遺物や遺構に関する詳細な説明は割愛し、古墳群および住居址群の全貌を把握し、その意義や性格に関する予察を述べることを主眼とした。文化財保護の立場からみて、残る同種・同類の古墳群に対する認識のためには、それが現在における急務であると信ずるからである。

1. 古墳群の様相

(1) 各古墳の墳丘部状態

当初、地表面における観察および地形測量によって、古墳あるいは古墳状遺構として予測されたものは、合計8基であった。しかし、実際の発掘調査によって、確実に古墳であることを確認できたのは、そのうちの5基にすぎず、しかも明らかに主体部を埋納していたものは、わずかに4基のみであった。

第1号墳

墳丘部の直径18.5m、周溝外側までの直径27.7mの円墳。墳頂の標高は27.86m、墳裾の現地表面は平均26.3mであるから、墳丘の高さは約1.5mを測る。しかし、墳丘内に保存されている古墳時代の旧地表面は、南側で27.2m、北側で26.94mを測り、盛土の部分高さはわずか1m足らずである。墳形も全体的に扁平であり、後世における墳頂部の削平の可能性が充分考えられる。

事実、墳頂より8本のSection-Beltを設

定して、徹底的に探索したが、ついに主体部も、明確な周溝も発見できなかった。ただ、後世の攪乱や樹木の根などのため、確実なことはいえないが、墳頂部に墓穴状遺構の痕跡と思われるものがあり、その近くの表土層中から滑石製の模造鏡1片が発見されている。

第2号墳

墳丘部直径 15.5m、周溝外縁直径 21.15m の円墳。墳頂の標高 30.58m 現地表面は平均 28.0m。旧地表面は南側で 28.78m、北側で 28.5m を測る。

内部主体は墳頂部にあり、墳頂から約 1m ほどの深さまで掘り込まれた土坑で、棺床部は、長さ 2.5m、巾 0.7m である。副葬品として、鉄製直刀 1 振、刀子 2 本、管玉 2 個、切子玉 2 個、ガラス玉 68 個、鉄環 2 個が発見された。これらの出土状態と、棺の木口に当る部分に築かれた粘土塊の位置および棺床の底面が舟底形を呈することなどから、これは割竹式の木棺直葬であったと思われる。

第3号墳

墳丘部直径 18.4m、周溝外縁直径 27.5m の円墳。墳頂の標高は 30.9m、現地表面は平均 28.0m を測る。すなわち墳丘の高さは現況では約 3m になる。しかし、旧地表面の標高は、南側で 28.7m、北側で 28.8m を測り、盛土部の高さは約 2m となる。

主体部は墳頂部にあり、長さ 2m、巾 0.5m の土坑で、墳頂部から 60~80cm ほど掘り込まれ、その底面は舟底形を呈する。中から鉄製直刀 1 振、刀子 2 口、琥珀・緑玉 18 顆が出土した。これも粘土塊の散在状態から、割竹式の木棺直葬であったと思われる。

第4号墳

墳丘部直径 13.2m、周溝外縁直径 15.0m の円墳で、その西端部が一部、道路のために切り崩されている。主体部をもつもののうち最小の規模。

内部主体は墳丘裾部に設けられており、長さ、2.2m、巾 65cm の土坑がそれと思われ、その舟底形を呈する棺床近くから、ガラス小玉 170 個だけが発見された。しかし、それに並行して、周溝部にテラス状に築かれた土段 あるいは、その部分だけ周溝が掘り残されたと思われる平坦面がありそこに長さ 1.5m、巾 50cm の土坑が掘り込まれている。やはり舟底形を呈する底面近くから、鉄製帯金具 2 片と鉄 鏃 1 片を発見した。これは、同一

被葬者の鉄製品だけを別にして副葬したのか、あるいは、その墳裾部や周溝上という位置から考えて、すでにこの時期には、1 基の古墳中に 2 体以上の同時埋葬または追葬の慣習がはじまっていた可能性もある。しかし、この場合、副葬品の区別からみて、いずれとも決しがたい。

第6号墳

墳丘部直径 18.0m、周溝外縁直径 23.5m の円墳。周溝部の深さは、これまでのものに比べて浅く、墳丘部の高さも低い。墳頂部の標高は 29.45m、墳裾部の現地表は 26.5~27.6m、旧地表面は 27.7~27.9m を測る。

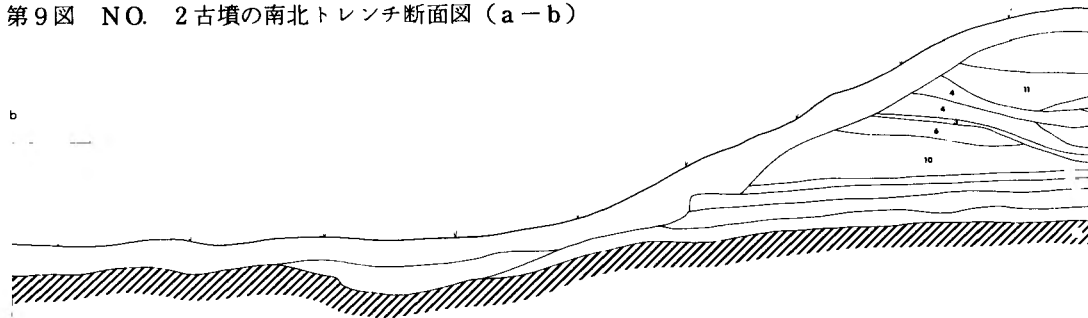
内部主体は墳頂部にも墳裾部にもなく、円形プランのほぼ中央部に、旧地表面から上に 60~70cm ほど盛り上げられた墳丘築成の途中の段階から、約 70~80cm ほどの深さまで竪穴式墓穴が掘り込まれている。これは長さ 1.8m、巾 70cm、底部が舟底形を呈し、木口粘土の所在から木棺直葬と思われる。副葬品としては、鉄製の直刀 1 振、剣 1 振、刀子十数本が検出されたが、装身具類は 1 切発見されなかった。

なお、第5号、第7号および第8号は、直径 3~7m の小型の円形を呈する塚で、いずれも主体部が発見されず、しかも周溝部がほとんどローム層にまで達しないほど浅かったとみえ、その形状は確認できなかった。しかも、墳丘部の盛土中から、ローム層の土塊などが発見されず、ほとんどが腐食した有機質土から成っていた。これはおそらく、当時の周辺の表土などをかき寄せて積み上げただけのもので、周溝はまだ掘り込まれず、そのローム質土などを盛り上げていない状態のものと思われる。

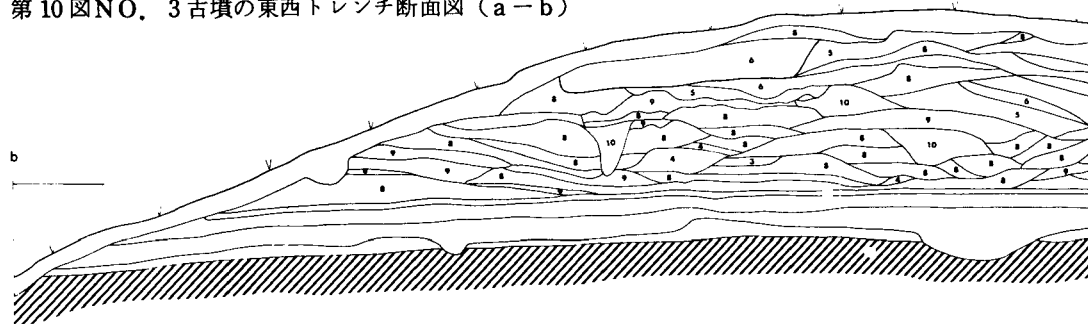
(2) 各墳丘部の断面的状況

各号の墳丘部における旧地表面、その上に載せられた盛土の状況、および旧地表下の自然堆積層の状態などは、厳密に言えばそれぞれ微妙な相異がみられるが、全体的に概観すると、一つの共通した傾向が捉えられる。これについて、いま、一般的な層序関係を捉えながら、その各層の特徴と出土遺物について簡単に触れておきたい。なお、盛土の土木技術的な問題については、Ⅵの総括のところでもまとめて論ずることにしたい。

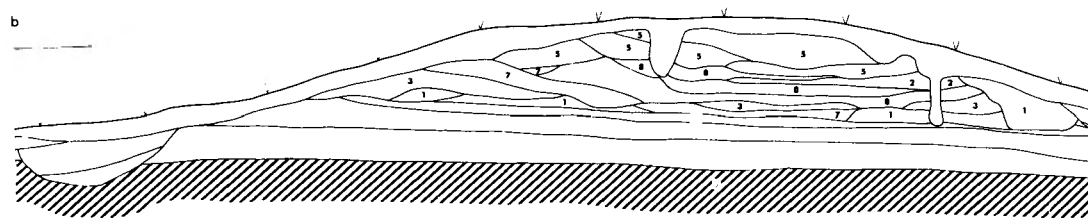
第9図 NO. 2古墳の南北トレンチ断面図（a-b）



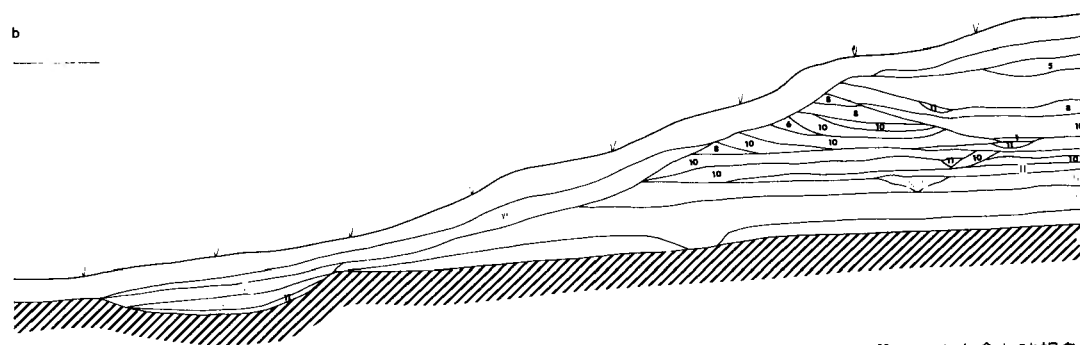
第10図NO. 3古墳の東西トレンチ断面図（a-b）



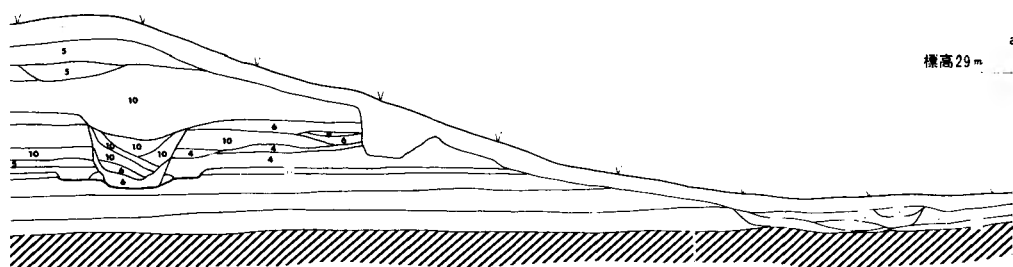
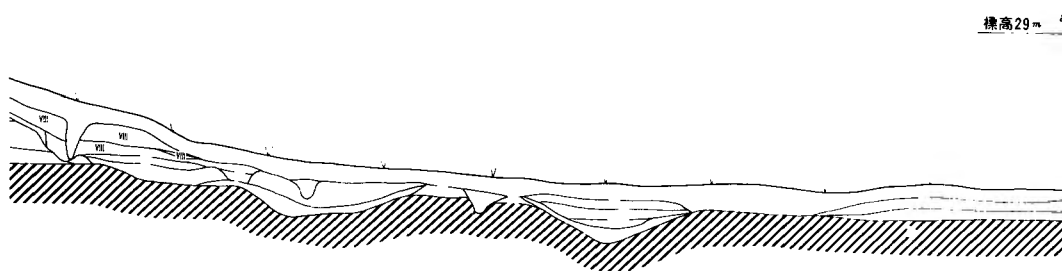
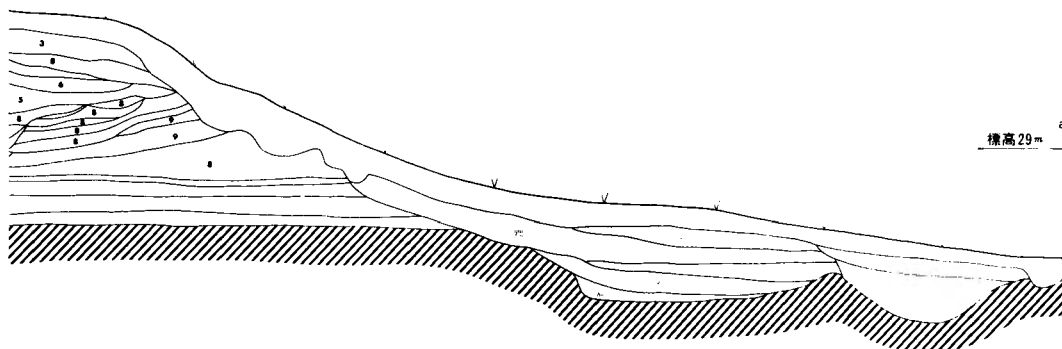
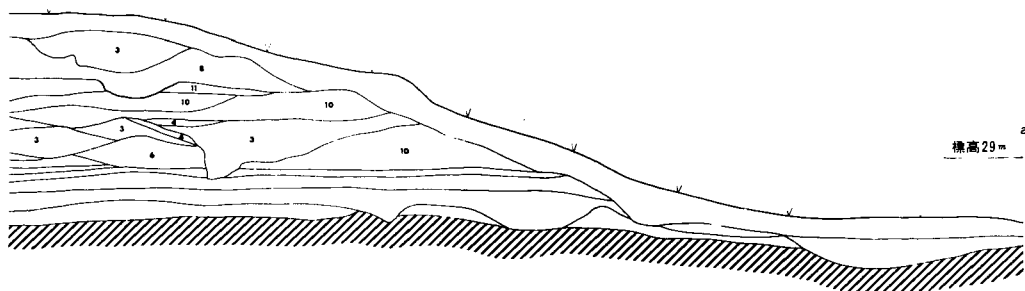
第11図 NO. 4古墳の東西トレンチ断面図（a-b）



第12図 NO. 6古墳の南北トレンチ断面図（a-b）



- | | | |
|---|---|---|
| <p>〈凡 例〉</p> <p>○自然堆積層（周溝内堆積層も含む）</p> <p>I 表 土 層</p> <p>II 黒 色 土 層</p> <p>III 黒 褐 色 土 層</p> | <p>IV 暗 褐 色 土 層</p> <p>V ソフトローム層</p> <p>VI ハードローム層</p> <p>VII ロームを含む黒褐色土層</p> <p>VIII ローム、黒土粒を含む黒褐色土層</p> <p>IX 黒 色 砂 層</p> | <p>X ロームを含む暗褐色土層</p> <p>XI 褐 色 土 層</p> <p>XII ロームを含む褐色土層</p> <p>XIII 黄 褐 色 土 層</p> <p>○墳 丘 部 盛 土</p> <p>I 黒 褐 色 土 層</p> |
|---|---|---|



0 5 m

- 2 ロームと黒土粒を含む黒褐色土層
- 3 暗 褐 色 土 層
- 4 黒土粒を含む暗褐色土層
- 5 ロームを含む暗褐色土層
- 6 ロームと黒土粒を含む暗褐色土層
- 7 褐 色 土 層

- 8 ソフトロームを主とする褐色土層
- 9 ソフトロームを主とし、ハードロームを含む褐色土層
- 10 ロームと黒土粒を含む褐色土層
- 11 ロームブロックを含む黄褐色土層

イ、現表土

木の根や雑草およびそれらの自然風化による腐蝕攪乱土層で、黒褐色を呈し、乾燥してばさばさしていて、その堆積は柔軟である。一般には、鬼高期の土師器、須恵器の破片、時には縄文早期・茅山期の土器片を少量含んでいる。

ロ、盛土

墳丘部の主体となる人為的に構築された土層、築造の際、まず周辺部の旧表土を削ってかき寄せその後に周溝部を穿さくしたローム層などを、その上に積み上げたものと思われる。腐蝕土層、黒色有機質土層、黒褐色土層、黄褐色土層（ソフト・ローム）、茶褐色土層（ハード・ローム）など、それに、これらの組合せによって無数のバラエティをもった混合土層が、20～30層にわたって複雑に重畳している。鬼高期の土師器および須恵器の破片、中には、縄文早期～後期の土器片がわずかに混入している。

ハ、周溝内堆積層

古墳築成後、長年にわたって、落葉や草木などが腐蝕して堆積したり、多少、墳丘の崩壊した土などが混入したと思われる黒色有機質土層。この層堆積にはほとんど人為的な乱れがみられず、プライマリーな状態を保っている。遺物は比較的少なく、鬼高期の土師器破片が主で、3号墳の周溝からは、完形の碗形土器が1箇出土している。

ニ、墳裾部堆積層

周溝内に黒色有機質土が堆積した後、さらに風雨や自然風化によって盛土が崩壊し、墳丘裾部に堆積したもの。暗褐色土層、この層からは、鬼高期の土師器破片がごくわずかに出土するのみ。

ホ、旧地表土

古墳築造時の地表面、土質の均質な黒色有機質土層。この旧地表は、墳丘の盛土直下にもみ残存しており、その周辺部には全く見出されない。これは、周辺部の旧地表土はすでに削られ、かき寄せられて、墳丘のベースに積み上げられたものと思われる。この層からは、完形に近い鬼高期の土師器あるいは焼土などの焚火址が発見されている。

ヘ、縄文時代文化層

暗褐色の均質な土層、縄文早期（茅山式）から前期（関山式）までの各時期の土器が少量づつ出土している。第3号墳の墳丘中央部に、関山式期の堅穴住居址1基が埋没しているのを発見した。

ト 自然堆積層

この台地の基盤をなすもので、黄褐色土層（ソフト・ローム）と茶褐色土層（ハード・ローム）人工的な遺構で、これ以上深く掘り込んだものは認められなかった。このローム層中からは、人工的な遺物は一切発見されなかった。

2、住居址群の様相

第1号墳と第2号墳との間から2基、第2号墳の東側から第6号墳の北側にかけて3基、合計5基の堅穴住居址が発見された。いずれも、古墳時代後期の鬼高式に属するもので、そのうち、3基の住居址が火災に遭ったと思われる、床面上に焼土や炭化物が散乱していた。住居址の番号は、その発見順序に従ってつけた。

第1号住居址

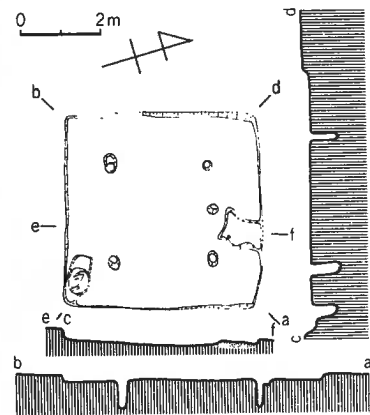
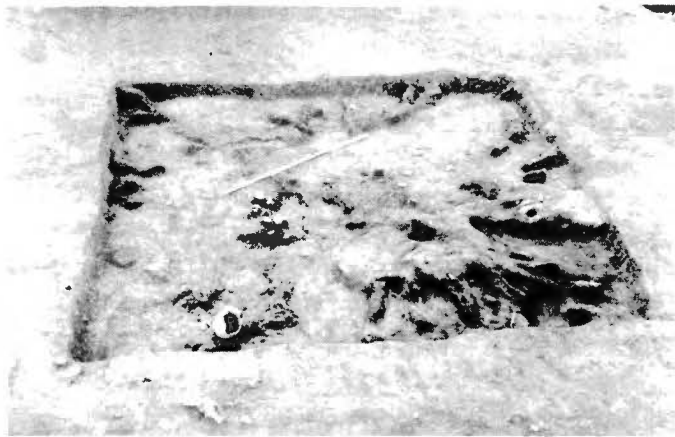
5.6×5.5 mのほぼ正方形を呈する堅穴式住居で、壁の立ち上りは、現存範囲で15～25 cmこの住居址の立地する台地の尾根部は、南から北に向けてゆるやかに傾斜しているが、住居址の床面はほぼ水平に築かれている。支柱穴は4隅に1口づつの計4口、直径30～40 cmの円形で、深さ60～80 cm、ほぼ等間隔に配置されていた。

住居址の西南隅に柱状の炭火物と、1 m×2 mの範囲に薄い焼土層が残存していたが、床面より5～10 cmほど浮いており、床面上には、炉やカマドのあった痕跡は認められなかった、しかし、床面上からは、壺形土器7個、高坏形土器6個、坏形土器5個、その他多数の破片が出土した。それらは、いずれも土師式土器で鬼高式に属する。

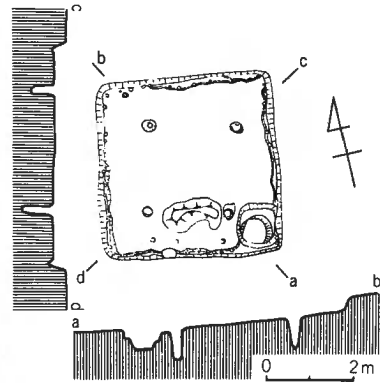
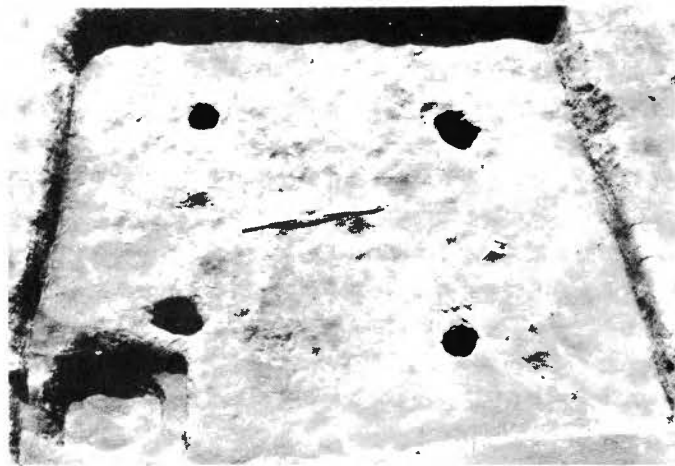
このほか、南側の壁中央部に接して、南北60 cm東西1 mの長方形を呈する貯蔵穴が発見され、その中からは、壺形土器1個、高坏形土器1個、深鉢形土器1個、甗1個が出土した。また、西北隅の柱穴に接して、石器が1個発見されている。

第2号住居址

第1号墳の墳裾からわずかに10 mほどの位置にあり、1辺約 5.1 mの正方形を呈し、4隅に直径15～20 cm、深さ80 cm前後の円形の支柱穴を有する。北側の壁の中央よりやや東寄りの位置に、砂質粘土で築かれたカマドがあり、東南隅の壁に接して60×130 cm、深さ70 cmの楕円形を呈する貯蔵穴が伴っていた。このカマドの位置から、この住居址の主軸はほぼ北東を指している。



第13図 第2号住居址の遺物出土状態 (左) と住居址実測図 (右)



第14図第3号住居址の全景 (上) と住居址実測図



第15図へたの台遺跡出土の土器
(上) 高坏形土器 第2号住居址出土
(右) 壺形土器 第1号住居址出土

なお、この床面上には、全面にわたっておびただしい量の炭火物と焼土が充満しており、とくに東半部においては、太さ10~15cm、長さ50~120cmの柱状の炭化物が、放射状に集中していた。その中心部には、直径1.5mの範囲に、厚さ10~15cmの焼土が堆積していた（第13図）。

この住居址からは、大型甕形土器1個、高環形土器1個、その他破片が少量出土したのみで、第1号住居址に比べると、出土遺物がきわめて少ない。土器以外では、滑石製小玉1個、土製紡錘車破片1個などがある。これらの遺物によって、この住居址が鬼高式期に属することが確認された。

第3号住居址

第6号墳の北側約10mの位置にあり、明らかに第7号墳の墳土の下から発見された。1辺約4.2mの正方形を呈する竪穴式で、その四隅に直径20~40cm、深さ40~60cmの支柱穴、南東隅に直径約80cm、深さ約60cmの貯蔵穴を伴う。カマドは不明。

床面上には、全面にわたって焼土や炭化物が堆積していたが、この住居址には炉もカマドも認められなかった。三方に周溝が認められたが、その欠けている南側が出入口であったと思われる。

この住居址は5基のうちもっとも規模が小さく、伴出遺物も乏しい。しかし、床面上に散乱する土器片によって、この住居址が鬼高式期に属することは確実である。

第4号住居址

1辺5.3mの正方形を呈する竪穴式住居址で、4隅に直径20~50cm、深さ約40cmの支柱穴があり、その東隅に直径約1.5m、深さ約60cmのほぼ円筒状を呈する貯蔵穴を伴っている。なお、北側の壁面中央部にカマドを構築した跡が歴然と残っている。このカマドの位置から、この住居址の主軸を求めると、ほぼ北北東を指している。ほかの住居址がほとんど共通して主軸を北に向けているのに比して、この第4号住居址だけがやや異っている点が注目される。そして、カマドのある北面以外の全面に周溝がめぐらされていた。

床面上には、焼土、灰および炭化物がかなり厚く、しかも乱脈ながらもそれらが互層をなして堆積していた。偶発的な火災というよりは、むしろ作為的な焼却を思わせる状態であった。坏、高坏、甕、壺などの大型破片が、床面上に散乱していたが、完形品は1個もなかった。これらの土器片に

よって、この住居址が鬼高式期に属することが確認できた。

第5号住居址

一辺5.8mのほぼ正方形を呈する竪穴式で、北側の壁面中央部にカマドがあった痕跡があり、4隅に直径20~40cm、深さ50~70cmの支柱穴があり、北面以外の全面に周溝がめぐっていたと思われる。ところが、この舌状台地の中央部に縦走する2条の溝状遺構があり、それがこの住居址の西半部を切断しているため、一部不明となっている。なお、この住居址の東南隅にも貯蔵穴が伴っていたらしい痕跡が認められている。

この床面上からも、多少の焼土、灰、炭化物などが発見され、土器片が散在していたが、溝状遺構のためかなり攪乱されており、明確なところはわからない。その土器片によって、この住居址も鬼高式期に属することだけは確認できた。

4. 溝状遺構

この古墳群および住居址群の展開する舌状台地尾根部の中央に、ローム層まで掘込んだ巾2.5m深さ平均0.4mの2条の溝が3~4mの間隔を保ちつゝ、南西から北東に向かって走っており、それが、東側の谷頭から台地に向かって削り込まれた、巾約20mの階段状遺構につながっている。それがさらに、台地の東側縁辺に構築された「腰曲輪」状遺構につながり、その先端に「馬出し」状の遺構がみられる。

この2条の溝状遺構の溝の中には、約2m間隔に柱穴が穿たれており、おそらく柵木のための杭が打ち込まれていたものと思われる。この2条の溝の間隔からみて、馬が1列にやっと通れる巾であり、その先端が「腰曲輪」や「馬出し」とつながっている点からみて、「馬寄せ」のための柵木溝であった可能性が大きい。しかも、先に述べた「階段状」遺構は、この台地の一つの「くびれ部」(neck)をなすものであり、それを縦断するトレンチ調査の結果、天目茶碗の破片なども発見されている。したがって、この舌状台地全体が中世における一種の「物見」か「砦」の役割を果たした城郭関係遺跡であった可能性が十分に考えられる。このことについては、後日、本報告において改めて詳述するので、ここではこれ以上触れないことにしたい。

V、考 察

今回の発掘によって得られた調査成果について、まだ十分な資料整理や分析的調査が終っていないので、ここに結論的な考察は極力避けたい。しかし、発掘調査を担当した者の義務として、調査中の問題意識や研究態度を表明するためにも、ここに、調査成果に関する二、三の問題点を指摘して、向後の参考に供したいと思う。

1. 古墳群展開の様相

当初の表面的観察やボーリングによる予備調査の時点では、第2号～第8号墳のいくつかは、相互の周溝の切合いにより、その築造年代に多少の前後が認められるものと推察された。ところが、各墳丘相互を結ぶSection-Beltの断面的観察や、周溝部の全面発掘の結果、周溝相互の切合いはまったくみられず、本古墳群の中で、もっとも規模が大きくもっとも接近し合っている第2号墳と第3号墳においてさえ、相互の周溝間に約1mほど間隙を残しているという事実を確認した。

このことは、各古墳の築造に当って、逐次無計画に選地したものではなく、当初よりあらかじめ第2号より第8号墳までを築造すべく計画設計がなされていた可能性を物語っている。したがって、いまおのおの古墳の被葬者の埋葬時期を別にして、単に墳丘自体の築造年代にのみ限ってみるならば、これらの墳丘がほぼ同時期に属するものであった可能性も十分考えられるのである。

一般に、古墳の所属年代とは、その被葬者の埋葬およびその葬送・祭祀がおこなわれた年代をいうのであるが、その時期と墳丘自体の築成の時期とが、必ずしも常に一致するとは限らない。ここに墳丘築造の土木的な問題が提示されるのである。

2. 墳丘築造の土木的技術

本古墳群の墳丘部周辺には、いかに多くのトレンチを設定してみても、古墳築造時における旧表土は、いずこにも発見されず、ただ各墳丘部の内部、盛土の下面においてのみ、わずかに認められるにすぎない。しかも、これら墳丘下に保存されている旧地表をつなげてみると、その地形は至って平坦であり、現地表面とほぼ平行しており、し

かも、現地表面より平均約1mほど高いレベルを示しているのである。

これは、これらの墳丘築造に当って、古墳の計画プランの縄張りを決めたのち、その周辺をかなり広範囲にわたって削り、その土を掻き集めて盛り上げたものと思われる。現在、それらの古墳の周溝部は、現地表面と同一レベルまたはそれ以上に埋まっているが、その土は、断面的調査の結果、おもに墳丘部の崩壊流入によるものであることが判明した。このように、墳丘部表面の土だけで、すでに周溝部が平坦に埋まり、なおかつ現状のような墳丘の高まりを残しているということは、当然、周溝以外のところから盛土が運ばれたと考えざるをえない。

このような墳丘部の築造過程については、各古墳ごとに設置した8本ずつのSection-Beltによる徹底的な断面調査によって、きわめて重要な事実を確認することができた。すなわち、複雑に重畳する盛土の各ブロック状の堆積土を分析した結果、その20～30層におよぶ各ブロックの土質が、周辺部の自然堆積層の単独および混合によるものであることが判明した。しかも、その築造過程をみると、墳丘の計画プランは、周溝部と同時に、その内側の旧地表面上に、もう一つの同心円形の縄張りがかかれ、まずその外側周辺の旧表土が削られ、その土が内側プランの縁辺から積み上げられている。しかも常に、外縁部から内側中央部へとスリバチ状に流し込まれている。これは墳丘部表面の崩壊を防ぐため、その縁辺をつきかためたものと思われる。そして、周溝部のもっとも深く掘り込まれた、関東ローム層はもっとも最終的に、墳丘の中心である墳頂部に盛り上げられ、それが主体部を載せるベースをなしている。

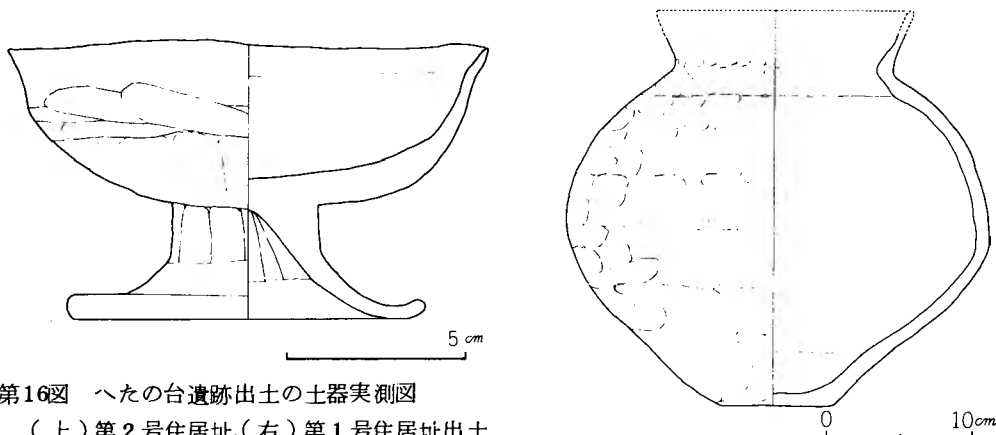
従来古墳は、設計プランの法量に合せて、まず周溝部から掘りはじめ、その土を内側に盛り上げて、一旦墳丘全体を完成させてから、その墳頂部なりを再び穿鑿して、改めて主体部を埋納するものと考えられてきた。ここでは、むしろ逆である。主体部埋納時には、墳頂部はスリバチ状または台形を呈し、その上に主体部を安置してから、はじめて周溝部が掘られ、その土が墳頂部に盛り上げられる。すなわち、周溝も主体部も発見されなかった第5号、第7号および第8号は、まだ被葬者が埋葬される以前の状態であると思われる。

第2表 へたの古墳群の概要

No.	形態	規模(m) 直径×高	主体部構造	副葬品および出土遺物	所属時期
1	円形	18.5×1.2	不明	滑石製模造鏡1	不明
2	円形	15.5×2.6	竪穴式土塚 木棺直葬	直刀1、刀子2、鉄製環2、碧玉製管玉2、 水昌切子玉3、ガラス小玉68	後期(鬼高)
3	円形	18.4×2.9	竪穴式土塚 木棺直葬	直刀1、刀子2、琥珀系玉18	後期(鬼高)
4	円形	13.2×1.8	竪穴式土塚 木棺直葬	鉄製響金具2、鉄鏃1、ガラス小玉170	後期(鬼高)
5	円形	6.0×0.8	不明	なし	不明
6	円形	18.0×1.8	竪穴式土塚 木棺直葬	直刀3、刀子10数本	後期(鬼高)
7	円形	7.0×0.8	不明	なし	不明

第3表 へたの台遺跡発見の住居址一覧

No.	規模(m) 長径×短径	柱穴 (口)	周溝	炉址	伴出遺物	所属時期 (型式)	備考
1	5.6×5.5	4	なし	なし	壺、甕、坏、高坏、 甑	鬼高	貯蔵穴あり
2	5.2×5.1	4	なし	カマド	甕、高坏、滑石製 小玉、紡錘車	鬼高	貯蔵穴あり
3	4.2×4.2	4	一部欠	不明	土師器片	鬼高	貯蔵穴あり
4	5.3×5.3	4	全周	カマド	土師器片	鬼高	貯蔵穴あり
5	5.8×5.8	4	半周	カマド	土師器片	鬼高	貯蔵穴あり



第16図 へたの台遺跡出土の土器実測図
(上)第2号住居址、(右)第1号住居址出土

3. 古墳群内の住居址群

この「へたの台」の尾根部は、元来、8基の古墳を築造するだけでさえ、あまりに狭小でありながら、その古墳の墳丘と墳丘のわずかな間隙を選んで、5基の竪穴住居址が展開しているのである。しかも、第1号墳は時期不明であるが、第2号墳、第3号墳、第4号墳および第5号墳は、いずれも鬼高式期に属するものと推定され、この5基の住居址とほぼ同時期に存在したと思われる。

元来、古墳群の所在する台地は、墓域あるいは聖域として、日常生活を営む集落立地とは厳格に区別されていると考えられてきた。そのような先入観から、古墳群の所在する台地においては、従来墳丘自体の発掘調査はおこなわれても、その周辺の台地平坦部が調査されたことは、いまだかつてなかったのである。

しかし、最近、筆者らの踏査によると、むしろ古墳時代後期の群集墳は、同時期の集落の近辺または周辺部にあり、古墳群と集落とは密接な位置にある。たとえば、東寺山古墳群と稲城台遺跡および西前原遺跡、庚塚古墳群と藤葉遺跡、榎作古墳群と榎作遺跡、にとな古墳群と高根田遺跡、上赤塚古墳群と上赤塚遺跡、八人塚古墳群と亀甲遺跡、六通古墳群と六通辺田遺跡、大野古墳と美濃戸遺跡、東大野古墳群と東大野遺跡、城楽台古墳群と向房遺跡など、千葉市内の例だけでも枚挙にいとまがない。中には、大宮町の鍛冶屋台古墳のように、一つの台地において中央部に鍛冶屋台遺跡という巨大な集落があり、その周辺部にほぼ同時の古墳群が展開している場合もある。

しかし、この遺跡においては、古墳群の中に住居址群が混在しており、これを集落とするには、その生活空間があまりに狭小である。しかも、古墳群の存在によって、日照や通風が悪く、生活環境がきわめて悪い。このような類例は、ほかの古墳群においてはまだ1例も発見されていないが、この場合、これらの住居址群は、その数が主体部を有する古墳の数と一致すること、その大半が作爲的に焼き払われていることなどから、日常生活の場と考えるよりは、むしろ古墳築造と直接関係のある、土工入夫の飯場や番小屋、あるいは、被葬者の「もがりや」と考えるべきであろう。

(千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員)

〔脚註〕

- (1) 武田宗久「古墳時代」『千葉市誌』 千葉市（昭和28年）
- (2) 中村恵次・市毛勲「千葉市中原古墳群調査報告」『古代』37号、早稲田大学（昭和36年）
- (3) 平野元三郎ほか「上総土気舟塚古墳の調査」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』（昭和39年）
中村恵次「千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査」『古代』48号 早稲田大学（昭和42年）
中村恵次・市毛勲「千葉県山武郡土気町舟塚古墳」『日本考古学年報』17 東京（昭和44年）
- (4) 武田宗久「千葉市今井町孤塚古墳」『千葉県遺跡調査報告書』 千葉県教育委員会（昭和40）
- (5) 「本古墳は既に明治24年9月に発掘され、内部に所在した遺物の多くは間もなく散失してしまった模様で、其の品目、出土状態などは明瞭でない。但し当時の土地所有者たる千葉寺町大塚留次郎氏宅には、太刀1振に變形加工を施したのがあり、又筆者等が調査した際に、石室の床面より1体分の人類遺骸、琥珀製霰玉3顆、鉄製馬具破片若干が発見された」という（註1）。
- (6) 武田宗久「千葉県千葉市七廻塚古墳」『日本考古学年報』11 東京（昭和38年）
- (7) 後藤和民「千葉市加曽利町兼坂古墳発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』創刊号、千葉市加曽利貝塚博物館（昭和43年）
- (8) 後藤和民「千葉市加曽利町新山古墳群発掘調査概報」『貝塚博物館紀要』創刊号 千葉市加曽利貝塚博物館（昭和43年）
- (9) 城の腰城 大宮町字城ノ腰、宮ノ前、上和田および青柳に所在する中世城郭で、一つの舌状台地の全域にわたって占地。平山城、丘陵台地上連郭式に属し、土塁、空堀、腰曲輪などの遺構が現存。一説に板倉筑前の居城という。
- (10) 城山城 大宮町字近江谷、俗称「城山」に所在。舌状台地の全域にわたって占地する平山城、丘陵台地上連郭式に属する中世城郭。二重土塁、空堀、腰曲輪などの遺構が遺存する。一説に坂尾五郎治の居城という。なお、現在の榮福寺は、かつて坂尾五郎治の居館であったものを、妙見堂の移転のために寄進したという。